

# 三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ

諫山遺跡 B 地区  
外園遺跡  
美濃尾遺跡  
佐知久保畑遺跡

1992・3

大分県下毛郡  
三光村教育委員会

## 例 言

1. 本書は、三光村教育委員会が国庫と県費の補助を得て平成3年度に実施した、三光地区遺跡群発掘調査事業の調査概要である。
2. 各調査の実施に当たっては、大分県教育庁管理課文化課、三光村企画課、建設課、土地所有者のご協力を得た。
3. 現地では、調査指導員のほかに田中良之（九州大学助教授）、大分県文化課諸氏のご指導、ご助言を得た。
4. 本書の編集及び執筆は、植田が行った。

## 目 次

第1章	はじめに	1
第2章	調査の概要	
	1. 諫山遺跡B地区	3
	2. 外壘遺跡	7
	3. 美濃尾遺跡	10
	4. 佐知久保畑遺跡	12
第3章	まとめ	14

## 挿 図 目 次

第1図	三光村内遺跡分布図	2
第2図	諫山遺跡位置図	3
第3図	溝上層図	4
第4図	諫山遺跡B地区遺構配置図	5
第5図	外壘遺跡位置図	7
第6図	銅鏡穴図	8
第7図	美濃尾遺跡位置図	10
第8図	美濃尾遺跡発掘トレンチ位置図	11
第9図	佐知久保畑遺跡位置図	12
第10図	佐知久保畑遺跡トレンチ位置図	12
第11図	佐知久保畑遺跡出土遺物実測図	13

## 第1章 はじめに

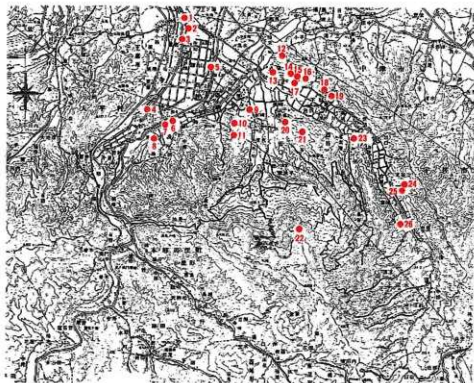
三光村は大分県の北端にあって、北を中津市、東を宇佐市、南を本耶馬溪町に接している。また村の西側には福岡県との境になる一級河川山国川が流れ周防灘へ注いでいる。三光村は村の南側背後にそびえる標高659mの八面山とそこから派生する低い丘陵、また山国川、犬丸川によって運搬堆積された上砂によってできた平野部とで形成されている。このような自然地形をもつ三光村は、また多くの遺跡が存在する場所でもある。しかし北大バイパスの開通に平行して大規模な開発が進行し、これに伴って重要遺跡の発見も相次いでいる。

本年度は、農協の育苗センター建設に伴う湊山遺跡の試掘調査、工場誘致に伴う美濃尾遺跡の試掘調査、企業誘致に伴う佐知久保畑遺跡の試掘調査、また台風19号の影響で発見された外園遺跡の調査をそれぞれ実施した。

調査団の構成は下記のとおりである。

### 調査団の構成

調査主体者	三光村教育委員会
調査責任者	松田一広(三光村教育長)
調査委員	賀川光夫(別府大学教授) 小田富士雄(福岡大学教授) 後藤宗俊(別府大学教授)
調査員	清水宗昭(大分県教育庁文化課埋蔵文化財第一係長) 後藤一重(主任) 原田昭一(主事) 植田由美(三光村教育委員会)
事務局	平田二男(三光村教育委員会次長) 萩原圭介( )
発掘作業員	藤野武志・清城玉美・上水紀代子・佐々木貞子・稲月智子・相良スナミ 相良トメ・相良ノブ子・高畑キヨカ・川野ヨシ子・釘丸雪子・松尾初枝
整理作業員	土橋厚子・乙峠里美



第1圖 三光村遺跡分布圖(1/50,000)

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1. 上ノ原横穴群(横穴)       | 14. 美濃尾遺跡(集落跡・散布地)  |
| 2. 佐知久保畑遺跡(集落跡・散布地) | 15. 倉迫平遺跡(集落跡・古墳)   |
| 3. 佐知遺跡(集落跡・散布地)    | 16. 倉迫二ツ塚古墳(古墳)     |
| 4. 城横穴群(横穴)         | 17. 野辺田横穴群(横穴)      |
| 5. 諫山遺跡群(集落跡・散布地)   | 18. ニツ塚古墳(古墳)       |
| 6. 白木遺跡(散布地)        | 19. 天神原横穴群(横穴)      |
| 7. 白木古墳群(古墳)        | 20. 岡崎遺跡(散布地)       |
| 8. 外園遺跡(中世墓)        | 21. 岡崎城跡(城跡)        |
| 9. 成恒城跡(城跡)         | 22. 八面山東部地区遺跡       |
| 10. 庵ノ尾横穴群(横穴)      | 23. 塔ノ熊麿寺・室跡(寺跡・室跡) |
| 11. 鴨山横穴群(横穴)       | 24. ズリヤネ城跡(城跡)      |
| 12. 北平横穴群(横穴)       | 25. 深水邸埋納遺跡         |
| 13. 洗悉横穴群(横穴)       | 26. 爰迫遺跡(地下式土坑)     |

## 第2章 調査の概要

### 1. 諫山遺跡B地区

#### 遺跡の位置

諫山遺跡B地区は、人分県下毛俣三光村大字原口に位置する。この遺跡は、山国川右岸の「下毛原丘陵」という洪積世台地上に立地している。西側は山国川をはさんで福岡県築上郡大平村を、また中津平野をも眺望することができる。この下毛原丘陵上には、極めて重要な遺跡が数多く存在している。昭和56年より調査の行われた上ノ原横穴墓群もこの丘陵上に位置する。また丘陵上の畑地帯では土器の散布範囲も広く、縄文時代から古代、中世等各時代にわたって大規模な集落の存在が想定される。諫山遺跡では昭和52年に耶馬溪道路の拡張工事により、石蓋土墳



第2図 諫山遺跡位置図(1/10,000)

墓とともに多量の土器が出土している。この丘陵上には他にも白木古墳群、城横穴墓群など多くの遺跡の存在が知られている。しかしこれらの遺跡全体を把握するにはまだまだ調査資料不足である。北大バイパスの開通に伴い、これら重要遺跡の宅地化等、開発が行われる前に、遺跡の性格を含めた遺構範囲の確認調査が必要とされる。



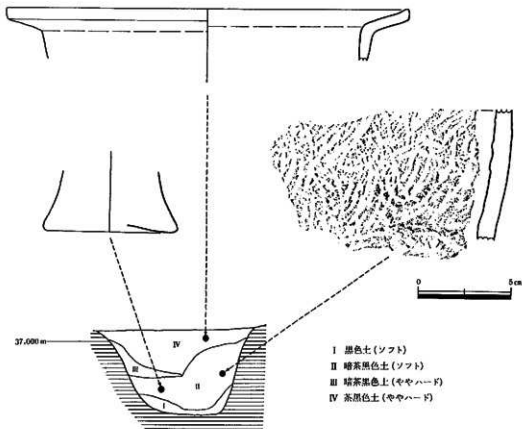
諫山遺跡遠景

## 調査の概要

遺跡は、山国川東岸中流域の洪積世台地上に位置する。眼下に広がる平野部との比高差は約15mである。調査区は閉塞された畑地であったため若干の攪乱を受けていたが、遺構の保存状態は比較的良好であった。平成2年度に行われた諫山遺跡A地区の調査では、住居跡2軒、土坑30基、溝状遺構2条等の遺構を検出している。遺物としては、壺型土器片、甕型土器片等の出上が認められた。平成3年度の調査では、溝状遺構2条、土坑120基等を検出した。

**S D-1** 幅約80cm、深さ約40cmを測る。溝の全長については把握できていないが、平成2年度に試掘調査を行った諫山遺跡A地区の溝(S D-1)に続くものと思われる。遺物は、須恵器甕の破片1点、弥生中期の土器片数点が出土している。S D-1の土の堆積状況は第3図の通りである。土器は第Ⅱ層と第Ⅲ層から出土している。

**P-5** 弥生時代中期後半の土坑である。掘り方は長軸50cm、短軸40cm、深さ約50cmを測る。出土遺物は弥生時代中期の甕型土器の底部1点である。



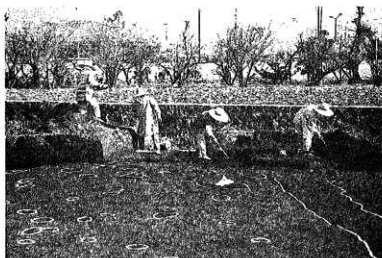
第3図 溝(SD-1)土層図



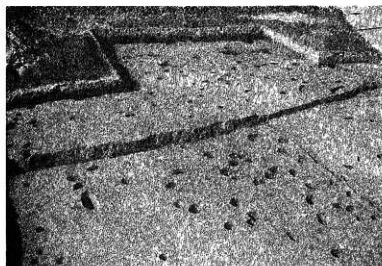
第4图 陝山遺跡B地区遺構配置图 (1/100)



検出状況



調査風景



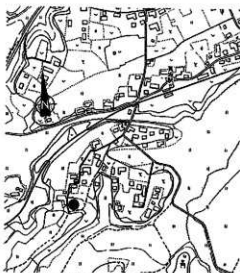
発掘状態



## 2. 外園遺跡

### 遺跡の位置と調査に至る経過

外園遺跡は、大分県下毛郡三光村大字臼木に位置する。この遺跡は八面山の西側に位置し、周辺には臼木古墳群、城横穴群をはじめとして多くの遺跡が所在している。中でも臼木古墳群は小袋谷を見下ろす標高約30mの位置に所在し、4基の横穴式石室をもつ墳が確認されている。今回調査が行われた外園遺跡は、この臼木古墳群から直線距離で約200mほど東側に行った所に所在している。この遺跡発見の契機となったのは、あの記録的な台風19号がもたらした影響で八面山をはじめとして多くの木が倒れたことに端を発す。この外園遺跡の周辺でも多



第5図 外園遺跡位置図(1/10,000)

くの木が倒れ、遺跡はその倒れた木を除去中見つけたものである。遺跡発見時、既に丘陵の斜面部から竈が割れた状態で露出しており、斜壁が1点斜面部の下に落ちていた。すぐに土地の持ち主である亀頭さんより教育委員会に連絡があり、その遺跡の取りあつかいについて協議を行った結果、教育委員会は、竈が丘陵の斜面部から出土しており周りの土が雨等で流出し、遺構が壊れる危険があったこと等の理由により、この遺跡を調査し今後の資料とすることにした。

### 調査の概要

調査は2日間に分けて行われた。この遺跡の周辺はこの地区所有の森林地帯であったため、調査を行うにあたっては木を傷つけない等の制約があり遺構の周辺については、調査を行っていない。調査初日は竈の上部の表土を除去し、掘り方を検出することから始めた。遺構面へは約15cm程度で送す。掘り方は竈の周辺わずか2~4cm程度であった。遺構は半分ほど既に壊されていたが、約70cm×70cmの土坑の中に大竈が埋納されていたと考えられる。初日は竈の土を半分ほど除去して終わった。2日目は残りの土の除去を行った。竈上部から約30cm程土を取りのぞいたところで、玉の出土が認められた。また、玉の出土レベルとほぼ同じレベルで骨片も多く認められた。

### 出土遺物

今回の調査では玉類48点、銅鏡1点、銅製チャンカラ1対の出土が認められた。玉類についてはその大半がガラス製で、他水晶製の切り子玉等がある。ガラス製玉の大きさは、最大のもので径1.9cm、長さ1.25cm、最小のもので径0.85cm、長さ0.58cmを測る。水晶製玉は最大のも

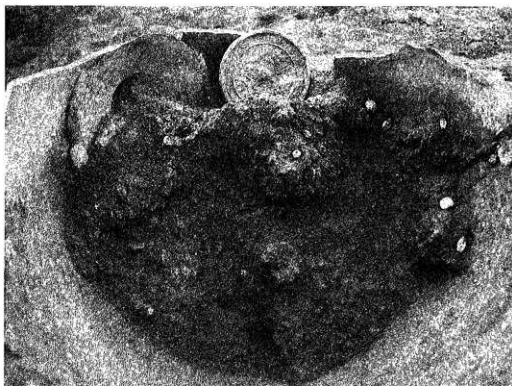
ので径1.78cm、長さ3.15cm、最小のもので径0.6cm、長さ0.48cmを測る。またガラス製の玉には、6弁の花びら状の形をもつものも3点出土している。銅鏡は径11.1cm、厚さは0.4cmである。鏡は中心に亀、その左側に2匹の鶴を配し周りに松、流水等をめぐらせている。



第6図 銅鏡実測図



喪棺出土状態



遺物出土状態

### 3. 美濃尾遺跡

#### 遺跡の位置

美濃尾遺跡は、大分県下毛郡三光村大字森山に位置する。この遺跡の標高は約80mを測る。遺跡は、八面山から中津平野に向かって北西側に延びる丘陵のほぼ末端近くに位置しており、本遺跡が所在する森山地区でさらに丘陵が二手に分かっている。この二手に分かれた丘陵の南側には、野辺田横穴墓群がある。この遺跡では35基の横穴墓群が確認されており、横穴墓のなかには、羨門部にベンガラで装飾が施されているものもある。また平成2年度には倉迫二ツ塚古墳群で、2基の古墳の調査が行われている。この古墳は南側に開口する横穴式石室をもつ円墳で、径9m、高さ3mの



第7図 美濃尾遺跡位置図(1/15,000)

マウンドをもつ1号墳では、羨門部から埴板、平瓶、甕等の出土がみられた。1号墳のすぐ東側にあり、径15m、高さ4mのマウンドをもつ2号墳では、石室のなかから土器片、鉄器、木類等の出土がみられた。この丘陵上には他に、三ツ塚古墳群、大神原横穴墓群等も所在しており、眼下に広がる平野部には大規模な集落があったと想定される。



美濃尾遺跡遠景

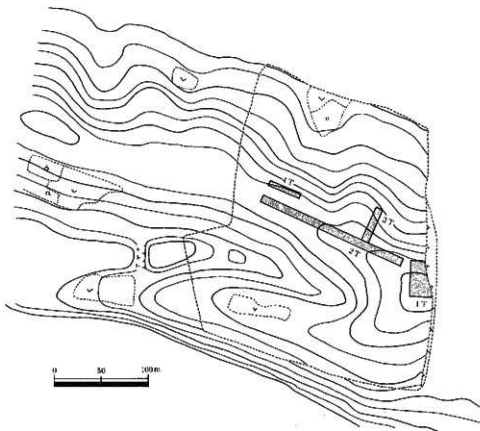
## 調査の概要

遺跡は東西に延びる丘陵にそって所在している。丘陵は東側で標高80m、西側で標高60mを測り、標高70mの地点でこの丘陵はさらに二手の低丘陵へと分かれる。調査は丘陵の東側と、二手に分かれた低丘陵の北側の部分に4本のトレンチを設定して行った。その結果溝状遺構2条、住居跡1軒、不定型土坑約50基を検出した。

SK-1 平成2年度の試掘調査で発見した倉迫平1号墳の北側に位置する。長軸約230cm、短軸約200cmの楕円形を呈し、深さは最大50cmを測る。土坑はこぶし大の石が多量に詰まっている。土器などの出土がないため、時代は特定できない。

SD-1 北側丘陵に設定した第3トレンチで検出した幅約1mの溝状遺構である。この遺構は丘陵斜面部にあり、丘陵頂上部からの比高差は約2mを測る。検出された溝状遺構の西側は平坦な部分が広がっており、この平坦部を囲むように溝が巡ることも考えられる。

1号住居跡 第2トレンチで検出されている。プランは、住居跡の1/3がトレンチ設定外にあるため定かではないが、一辺が約3m~4mのほぼ正方形のプランをもつと考えられる。

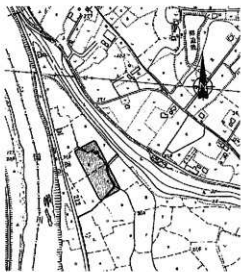


第8図 美濃尾遺跡発掘トレンチ位置図(1/4,000)

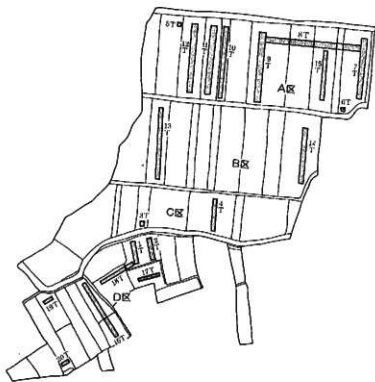
#### 4. 佐知久保畑遺跡

##### 遺跡の位置

佐知久保畑遺跡は、大分県下毛郡三光村大字佐知に位置する。この遺跡は山間川東岸の標高20mの位置に所在する。遺跡の周辺には上ノ原横穴墓群、佐知遺跡等がある。佐知遺跡は、平成元年度に佐知バイパス建設に伴って発掘調査が行われている。この調査では縄文時代から鎌倉時代までの遺構が検出され、住居跡、溝等から多くの土器、石器等が出土している。佐知久保畑遺跡は、この佐知遺跡の所在する微高地の末端に位置している。遺跡の周辺は圃場整備事業によって旧地形を止めていないが、一部圃場整備の行われていない地点で旧地形を確認することができる。



第9図 佐知久保畑遺跡位置図  
(1/10,000)



第10図 佐知久保畑遺跡トレンチ位置図(1/5,000)

## 調査の概要

佐知久保知遺跡では今までに15本のトレンチを設定して遺構、遺物の確認調査を行ってきた。調査予定面積が広いため、調査前遺跡をA、B、C、Dの4つの区域に分け、その区域をそれぞれで遺構、遺物の確認を行うこととした。その結果、A、B、C区はすでに開場整備事業で旧地形を止めておらず遺構等は検出されていない。しかし開場整備が行われておらず今でも旧地形を止めているD区では、保存状態の極めて良好な遺構を検出することができた。今回の確認調査はこのD区に第16トレンチ、第17トレンチ、第18トレンチ、第19トレンチ、第20トレンチの5本のトレンチを設定して遺構範囲の確認調査を行った。

各トレンチで確認された遺構、遺物は下記のとおりである。

**第16トレンチ** 弥生時代中期の甕の底部と、十銭の破片等が出土している。遺構面へは表土、約150cmで達する。このトレンチは包含層が良好な状態で残っており、遺物等の出土も多い。

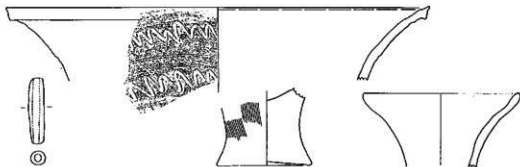
**第17トレンチ** 弥生式土器の口縁部破片、須恵器片等が出土している。このトレンチでは遺物の包含層を確認したのみで遺構面までは掘り下げていない。出土した遺物はローリングを全く受けていない。

**第18トレンチ** 十銭、埴口縁部破片、甕底部破片等が出土している。このトレンチは一部遺構面まで削り下げ、ピット等を検出している。包含層の厚さは約80cmである。

**第19トレンチ** 弥生時代中期後半の甕の口縁部が出土している。遺物はローリングを全く受けておらず、保存状態は良好である。

**第20トレンチ** 遺物の出土量は非常に多い。須恵器杯の破片、弥生式土器片等が出土している。このトレンチでは包含層を確認しただけである。

まとめ 今回の発掘調査は、主に包含層の確認に止まり遺構面まで掘り下げたものは少なかった。しかし保存状態の良好な包含層を確認したことで、このD区全体に遺構が広がることを確認されたと思われる。今後残りのA、B、C区についてもさらに細かい確認調査を行い、遺跡の範囲、水田などの有無について調査を行う必要がある。



第11図 佐知久保知遺跡出土遺物実測図(1/3)

### 第3章 ま と め

今年度三光村では諱山遺跡B地区、外園遺跡、美濃尾遺跡、佐知久保畑遺跡の4ヶ所の調査を行った。このうち外園遺跡は遺構が崩れる危険があったため緊急に調査を行ったものであるが、他の遺跡はすべて開発に伴う試験調査である。

諱山遺跡B地区は昨年調査を行ったA地区の北側に調査区を設定し、試験調査を行った。出土遺物は昨年とほぼ同様、弥生時代中期後半の土器片が出土している。遺構については、調査区の中程で検出されたSD-1がA地区検出の跡に続くものと想定され、溝のなかからは弥生時代中期の壘底部片等が出土している。諱山遺跡の周辺では昭和52年、耶馬溪道路の拡張工事中、石蓋土壌炭が出土している。このことと、B地区周辺で石蓋の一部が見つかったことなどから、この下毛原丘陵上には大規模な石蓋土壌炭群の存在が考えられる。近年の開発ラッシュでこの付近も宅地化等開発が進んでおり、今後遺跡の確認調査が急がれる地区である。

外園遺跡の調査は、出土した壘棺墓とその周辺について行った。調査の結果壘の中からは玉類、銅鏡、チャンカラが出土した。壘の中には人骨片が多く含まれており、出土遺物などから中世の僧侶の墓ではないかと考えられる。村内では最近、中世の遺跡も幾つか見つかり、これらの遺跡も含めて今後の検討が必要とされる。

美濃尾遺跡では4本のトレンチを入れ試験調査を行い、住居跡等を検出している。今後さらに試験調査を行い、遺構範囲の確認を行う予定である。

佐知久保畑遺跡では弥生時代から古墳時代の遺物を多数含んだ包含層を検出した。包含層が厚かったため遺構面まで達し、調査を行ったものは少ない。この遺跡には字名で東屋敷という地名が残っており、佐知遺跡と同じく中世の遺構が検出されることも考えられる。今後この地区の集落構造を解明するうえで重要な遺跡である。

以上、今年度三光村では4ヶ所の調査を実施し、そのすべてで遺構を検出した。三光地区は今まで大きな開発が入っておらず遺跡が良好な状態で残っている所が多い。しかしながら北大道路の開通で年々三光村にも開発の波が押し寄せている。今後さらに遺跡の範囲、性格等の確認調査を実施し、開発部局、開発業者との十分な協議を行って行く必要がある。



---

三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ

1992年3月

発行／三光村教育委員会  
(下心部三光村大字原口)

印刷／昭和堂印刷

---